
勇者と魔王SS～活動報告小話集 2～

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王SS～活動報告小話集2～

【Zコード】

N1044BA

【作者名】

ゆずねりじの

【あらすじ】

2012年度、新年の福袋的小話集。活動報告と、ブログ、アトリエゆずねりじのじょこ書いていたSS。

基本的におバカさんな話。

警告タグの「残酷な描[写]あり」が一瞬、「残念な描[写]あり」に見えた。それだったら堂々とつけるんだけどな。

* * *

「ごく普通の女子高生、神山透子はある日、異世界に勇者として召喚される……魔王を倒せと、荒野に放り出されるのだが。

唐突に。

田の前には、超絶美形。漆黒の髪に深紅の瞳、着る人を選ぶだら「」「」な衣装をあつさりと着こなし、気品すら漂わせている。うわ、足長っ。腰の位置、高っ。

「じでじて飾りがついたマントをひるがえし、かつん、かつん、とブーツの音を響かせながら、階段を降りてくる。なんの番組。なんの映画。似合いすぎだろう。決まりすぎて厭味っぽいぞ。ちょっとアレだけどね。頭にねじくれた角あるけどね。背中に真っ黒な羽あるけどね。触つたら痛そうな、爪が長く伸びてるけどね！」

「あたしの目の前まで来ると、超絶美形はにじりともせずこいつちらを睥睨し、言った。

「そなたがこたび、召喚されし勇者か……よくぞ、この城までたどりついた」

「他力本願な王様始め、この世界の住人には、えらいメーワクしたわ」

伝説の聖剣とやらを構えながら、あたしは言った。

「フツーの女子高生呼び出して、世界の為に働けって、何なわけ？何様？この世界の事は、この世界の人間がどうにかするものでしううが！」

「んななまくら一本で、右も左もわからない人間を城からほり出しあつて、やる気ないにも程があるでしょー！」

「国民死なせたらバッシングあるから、異世界から勇者呼び出して戦わせてるつて、思い切り言いやがったわよ、あのクサレ王ー！」

それなりに美形だつたが、やる気のなさが丸わかりの祝福をおざなりにされ、城から追い出された。予算もないとかで、持たされたものは、この聖剣の他には、服が一式と三日分の食糧だけ。おかげで魔王城のある荒野にたどり着くまで、アルバイトをしながら食いつなぐしかなかつた。

「皿洗いと踊り子が本業になりかけたわよ、おかげでー！」

「バレエを習つていて良かつた。

「その境遇には同情するが……、ここまで来たといつ事は、吾と戦う意思ありと見て良いか」

「ああ、まあ、あんたには恨みはないけどねー、変な首輪つけられちやつてさ、あんたと戦つて倒さないと、あたしが死ぬらしいのよ」

あたしは自分の首を示した。クサレ王と腹黒神官があたしにつけた、黒い首輪がそこにあつた。

魔王を倒すか、あたしが死ぬかしないと外れない。そして、一年の期限が過ぎると、自動的にあたしの首を絞めて命を奪う。

「こんな、もろに呪いのアイテムで枷をつけないと安心できないなんて、どれだけ他の勇者に反逆されてきたんだ。その勇者たちの気持ちわかるけど！」

「死にたくないから、ここまで来たわ」

逃げ出す事すらできないうち。

魔王は、あたしを見つめ、ふうと息をついた。

「ま」と、愚かしい行いを繰り返すな、人の國の王とその取り巻きは。

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ
「そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全
力で嫌がるし。でも、死にたくないからわ」

剣を構える。

「だから付き合つてよ、悪いけど

礼儀らしいから、名乗るわね。あたしは透子。とおい 神山透子かみやま とおい。食べ歩
きが好きな、ただの女子高生……だった

「トオ！」

魔王は、不思議な発音だと聞いたげに、あたしの名前を繰り返し

た。

「礼にのつとり、吾も名乗れり。
北の荒野、魔の一族を統べる王、

タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

時が止まつた。

「.....は？」

「タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

もう一度、律儀に名乗つてくれた。なんかいい人だな魔王！　いやそれより。

「.....タラちゃんですか？」

玲瓏たる聲音と、麗しい發音で名乗られたその名は、
一般庶民で、この世界の言語の發音に慣れていないあたしの耳には、某国民的アニメの登場人物の名前にしか聞こえなかつた。

こんなに美形なのに、タラちゃん！

魔王さまなの、タリちゃん！

はとこの名前はイクリちゃんで、猫の名前はタマですか！ そうしてお魚くわえたドラ猫を、追いかけたりするんですか～っ！！！

「えっと、あ～……」

脳裏に走馬灯のように走る、元の世界のアニメの映像と主題歌。霧散しかけた氣力をなんとか引き集め、あたしは剣を構え直すと、魔王に言った。

「お母さんの名前は、サザエですか！」

……でも、やっぱり混乱していたらしい。

* * *

ピンポイントでギャグが書きたくなって、書いてみました。

とりあえずこのあと、魔王さまは首輪を外してくれ、元の世界に帰る方法を探してくれます。

2011年11月27日 活動報告&アトコヒョウばり記事よつ

続きを読む

ひよひよ、と、小鳥の声がした。

「ちらかん匾下がり。

柔らかな芝生の上に、分厚いキルトの布を敷き、あたしは絶贊、
ピクニック中だつた。

「うをを～、このチキン絶品！　ハーマスターードがきこへる～。

「このサンドイッチも！　チーズとバジルのハーモニーが、ま
つたりとして、しかししつこくなく～」

「ミルクティーもあるわ～」

隣にいる魔王が、熱いお茶を注いでくれた。

「つづ～つ、五臓六腑ごりやくろくふくにしみ渡る……つ」

「そればどういう表現だ」

「端的に言つなら、うみやー！」

「そうか。料理番に伝えておく。喜ぶだね～」

あたたかな日の光。おだやかな風。鳥の声。花の香り。
お茶を入れてくれる迫力美形。

そして、……美味しい～」はん～。

「やー、もへ、幸せにつぱいですよ、タラちゃん」

「タラチ・イアンテスだ」

頭にねじれた角、背中に羽つきの迫力美形が言った。ティーポット片手に持ちながら。

「日本人の耳には『タラちゃんです』と聞こえるんですよ、タラちゃん。

ちなみに『ちゃん』は親愛を意味する呼び掛けのようなものです」「トオフは吾に、親愛を覚えていいのか？ 吾は、人族の者が忌避する魔族の王ぞ？」

「あのクサレ王と腹黒神官に比べれば、天使のようです！ 『はん美味しいし、首輪はずしてくれたし』

あたしはそつと、マルクティーをもう一口飲んだ。

「正直言つて、この世界とは何の関係もないんですよ、あたし。なのにいきなり呼び出されて、勝手に首輪つけられて。

戦つて魔王倒して来い、さもないと殺すなんて言われて、この世界の人間に義理とか信頼とか、もてるわけないでしょ？」「吾には持てるのか？」

「魔王陛下はあたしの命を救ってくれた。美味しい』はんもくれた。それにより、」

あたしはぐつ、と拳を握った。

「タラちゃんなんて名前の人には、審意を持つのは難しこんですよー。
一般庶民な日本人としては！」

某イソノさん家のホームドア、おやるべじ。予ども心にすりこまれた、「はーい」や、「けやーん」の一言や笑顔が、どうしても、どうしても、え、ハ、シ、て、もー！

魔王さま見ると、くわせりと脳裏にフイードバック。だつて、タラちゃんだし！

魔王なタラちゃんは、良くわからぬといつ顔をした。

「良くわからぬが……、まあ。しばらば、ヒヒでのんびりするが良い。勇者一人ぐらい、養つても問題はないゆえな」「ありがとうござります。あ、でも、役に立てそうなどあつたら言つて。無駄飯喰らうはイヤだから。荒事以外でなら協力するし」「心配するな。じく普通のジョシコホセイとやらのそなたに、荒事なぞ頼んだりはせぬ。

異世界人のそなたでもできそつな仕事なら、何かしら、あるだろう。執事のオルテスに頼んでおく

「あざーっす！」
「それはどうこつ意味だ」
「ありがとうござります、の略」
「そつか。あざーっす？」
「いや、タラちゃん、そんな真面目な顔して言わないで。軽いノリで言つ言葉だから」
「ふむっ」

首をかしげて、魔王陛下は、あざーっす、とか、あざっす、とか、口の中でつぶやいている。迫力美形に言われると、ギャップがあります。

「それにしても、本当なの？　お母さんの名前」
「む？　ああ。驚いたぞ、トオコに問われた時は」「いや、まさかと思つたんだけど……」
「異界の勇者には、予知や透視などの能力があるのか？」
「や、あたしにはないです、そんな力。もしあるとすれば、原作者の……ええっと。長谷川町子先生にじやないですかね」
「ハセー・ガウ・アマー・チカ？　預言者か何かなのか」
「預言者というか……、あたしの住んでた日本という国で、多くの国民に多大な影響を及ぼした、マンガ家という職業の人です。もう亡くなつてますが、いまだに彼女の書いたものは読み継がれ、語り継がれています」

「そうか。芸術家は、預言者と似たところがある。偉大な人物だったのだな。

吾のみならず、母の名すら看破していたとは「初めて聞いた時は、冗談かと思つたよ……」

魔王タラチ・イアンデス・グロウガリアス。

日本人の耳には「タラちゃんです」と聞こえる名前を持つ母親の名は。

「サザエさんなんだもんなんあ……」

迫力美形な魔王のお母さまは、迫力美人なきらきらしい女性だった。その女性に笑顔で、『サザエです』と名乗られた衝撃は、いまだ新しい。

「サジヤー・エイデス・グロウガリアスだ」

「うん、やっぱ『サザエです』としか聞こえないわ」

長谷川町子は、偉大だった。

* * *

アトリエゆずはらの、拍手お礼として置いていたもの。なんだか続
いてしまった。

意外でした。前編。

「ある意味、必然であると言えようのう」

迫力美女が言つた。堂々たる体躯の肉食系美人である。流れ落ちる漆黒の巻き毛。真紅の瞳。象牙色をした頭の角が、つややかにセクシー。いや。

「必然？」

「つむ。まあ、説明すると長くなるのだが

大きな窓から差し込む光が、部屋中にゆつたりと、陰影をつけている。

美しい調度品が、上品に配置されたサンルーム。
白と金でできたティーテーブルには、可愛らしいお菓子を盛った器と、ティーセット。

そうしてデコラティブでありながら、纖細かつ優美な椅子に腰かける、頭に角のある迫力美人。

現魔王の母君であらせられる、グロウガリアスの魔将。麗しき魔剣の女王。

「何が必然なんですか、サザエさん」

「サジヤー・エイデスじゃ」

「サザエです、としか聞こえません……」

「まあ、人族の耳には、魔族の発音は難しかろうじのう」

鷹揚に笑いつつ、サザエさんは、田の前の椅子を示した。

「まずは、座れ」

「いえ、あたしは使用人ですので」

「わらわが構わぬと言つておる。座れ」

迫力美人なサザエさんに言われ、あたしはスカートのフリルを気にしながら、優美な曲線を描く椅子に腰かけた。

タラちゃんの口利きで、あたしは現在、メイドをしている。大変な事も多いけど、でも、それなりに充実している。平穏な日々があるのって、ありがたい。たまにちょっと、元の世界の事を思い出して悲しくはなる。でも、忙しく働いていれば、気もまぎれる。

それに……うれしいこともあった。お仕着せなんだけど、デザインが可愛いんだ、魔王城のメイド服！ 渡された時にはきやーきやー言つて喜んじゃった。

ただ、たまにこうして、魔王さまや母君さまに、話し相手になれと言われるのが。ちょっと、気まずいと言つか。

と、思つていたら、合図をしたサザエさんに、ささつと近寄る先輩メイドさん。そして素早く用意された、もう一腳のティーカップに注がれる紅茶。

「ひとり田の前にカップを置かれ、あたしは青ざめた。

「あなたも飲むが良い」

「いえ、あたしは」

「飲め。一人で茶をたしなんでも、楽しくもなんともない」

サザエさんは微笑みながら、しかし逆らえない何かをかもしだしつつ、あたしに言った。うん。逆らえない。逆らつたら何か、次元の彼方に飛ばされてしまいそうな気がする。

手にしたティーカップにしかし、あたしの緊張は倍増。

「なんじゃ。ミルクティーは嫌いかえ？」

「いえ、好きです。好きなんですが、ちょっと緊張してしまって」

「かわゆい事を言いおるのう」

ほほほほほ、とサザエさんが優雅に笑う。あたしも強ばつた笑顔になつた。いや、ミルクティーは大好きだよ！ でも、怖いんだつて、このティーカップ！ 持つてるのが！

手にしたカップに視線を落とす。優雅な金色の持ち手がついた、藍色のカップ。

カップの形に削り出し、中をくり抜き、唇を当てる部分に違和感がないよう、磨き抜いた青金石^{ラピスラズリ}。

落としたら、それまで。薄く削つた宝玉のカップは、ぱんつと碎

けてしまつだらう。それほど纖細、そして匠の技を尽くした芸術品が、あつさりとあたしの手の中に。

多いんだ、そういうの、魔王城。こないだも、ガラスだと思つていたら、水晶をくりぬいて造られたグラスでしたよ。それが何、ダースも並んでましたよ、キッチンの棚！　お皿やボウルでも同じバージョンがありましたね！　紅水晶を削つて形を整えたお皿がとか、紫水晶のボウルとかね！　あの大きさのもの作るのに、どんだけの水晶の塊が必要だつたんだ。磨けて言われたけど、手が震えましたよ、落としたらどうしようつて思つて！

そういうグラスやカップ、お皿やボウルで、飲み食いできる神経がわかりません、サザエさん……。

「人の王の愚劣な行いは、代々続いているでなあ。そなたのような異世界の人間を誘拐しては、剣を持たせ、われらの領土に放り出す。かような間に合せのような勇者に倒されるわれらではないが、犯罪の片棒をかつがれるようではな。良い気分ではない」

恐る恐る、涙目になりつつ一口、じくり。そうしてみると、サザエさんが言った。

眉をひそめた顔でさえ美人。

「え、あ、間に合わせ、ですか？」

「で、あらう？　本氣でわれらをどうにかしたいのであれば、自国の魔力ある優秀な若者を鍛え、軍を作つたほうがまだ、可能性はある。だとうに、剣を持つ術すら知らぬような異世界の人間をさら

つてきては、死にたくないば戦つて来いと……」「

ああ。さうだよね。言われてみれば、間に合わせだよね。あたしも、武器なんて持つたことのない人間だつたし。

「自分の国の民を使うと、王の評判が悪くなるから、異世界の人間を呼んでいる、と言われました……」

それに、そんな事も言つていた。考えてみれば、あたしはある王と神官にとつて、使い捨ての道具だつたんだ。

胸が痛む。そんな理由であたしは、この世界に呼び出され。

向こうの世界を、向こうの世界であたしが持つっていた、大切なもの全てを奪われた。

「トオコも災難であつたな」

「いえ……あたしは。幸運でした。タラちゃんに、首輪はずしてもらつたし。今もここで、働かせてもらつてるし

それでも、自分が幸運であったことはわかる。あのまま殺されても、おかしくはなかつた。でも、生かされた。助けてもらつた。殺せと命じられた魔族の王に。

「トオコは、けなげよの」

サザエさんが、ふと微笑んだ。うわう。綺麗。綺麗。美人！

「いいいいえ。けなげとかそんなんじゃ……、あう、えと、必然といつのは、それで？」

あまりの美しさに目がくらみそうにならつと言つと、サザエさんは、「そうであつたな」と言つてうなずいた。

意外でした。前編。（後書き）

ラピスラズリや水晶くり抜きのカップやグラスは、実物を見たことがあります。

ロマノフ王朝か何かの美術展で、展示されていました。

本水晶の光り方って、ガラスとでは違うんですね……それが無造作に、カットグラスの形でずらつと並んでいるのを見て、庶民なわたしは気分が悪くなりました。あれでお茶とか飲むって心臓に悪いよ……。

意外でした。中編。

「そなた、われらの名に親しみを覚えたであろう?」

サザエさんが言った。あたしは、ほえ? と妙な声を上げた。

「なんじや。息子に言つたのであるう? わらわと息子の名に対しても、敵対する思いを抱けない、親しみを覚えると
「あ~。まあ。言つた……ね」

あれが。あのピクニックの時の発言か。
だつて、タラちゃんと、サザエさんだもんなんあ。

「ハッセ・ガウー・アマールチカは、偉大な人物であつたようじゃ
な」

「長谷川町子先生です」

異世界発音されると、どこの人ですか、な感じだね。

「『いじわるばあさん』と、『サザエさん』が代表作で……」

「おお。それか。わらわの名に似ておるの? サジヤー・ヒッシャン」

「や、『サザエさん』……え~, 日本語で、自己紹介の時に、『で

『とか、『ドーリーさま』とかこうして葉をつけてですね

あのアニメ、確か、サザエでござります、って言つてなかつたっけ。

「『サザエ』がです」

と、思つたら、優雅な笑みを浮かべた美女に言われた。……何…?

「うむ、必然じゃな」

「え、いや、いまの何ですか、サザエさん!」

「わらわの名を名乗つただけじゃ」

はい?

「え、確か、『サザエです』……」

「通り名はな。幼名も入れると、わらわの名は、

サジヤー・エイテ・コウシャ・ザイ・マルスと書つ

「……」

すみません。

庶民な異世界人の耳には、『サザエでござります』としか、聞こ

えません。

「長いので、普段はサジャー・ハイテスと名乗つておるが」

正門が『サザヒで』『れこまゆ』で、短くしたのが『サザヒです』。

「うん。トラン語だけ? それが普通の言こ方になつてゐよ。

「ああああの。それじゃ、タラちゃんにも別な名前が?」

「あれは、タラチ・イアンデスのまじや」

「わよひですか……」

「なんとなく、ほつとした。いや、別な名前があつても良こんだけ
どねー?」

「ええと、それで……何の話でしたか」

「必然の話じや」

いかん。『サザヒで』『れこまます』の衝撃が激しくて、忘れる所だ
つた。

「あ、はい。必然?」

「人の王の悪辣さにな、われらも辟易したのじや」

「あくまつ へきえき

ラピスラズリのティーカップを持ち上げ、優雅にサザエさんは、ミルクティーをすすつた。

「したがのう。異世界からの客人は、われらの姿を見ただけで恐慌状態になる者もいてのう」

「あ、えーと……すみません」

確かに、角や翼のある姿は、予備知識なしに地球の人間が見たら……現代日本ではそれほどでもないけれど。時代によつては、恐怖にかられる人もいただろう。

魔族の人たちが悪いわけでもないのに。

「なぜ、トオコが謝るのじや」

「いえ、何だか……すみません」

「おかしな娘じゅのう」

ほほほ、とサザエさんは笑つた。

「見慣れぬ姿の者を見れば、怯えるのは生き物の常だ。仕方がないわな。

したが、こちらの話も聞かず、武器を振り回し続けられてはのう。こちらも困るのじや。

戦いたくも、傷つけたくもないのに、怪我をやらざるを得なくて

な。こちらも最初は事情もわからず。起じりすとも良い悲劇が起きたりもしたわ」

「ああ……はい」

あたしはちょっと神妙な顔になつた。あたしは幸運だった。でも。間に合わずに命を落とした、異世界人もいたのかもしれない。

「まあ、それでな。われらも考えたのよ」

サザエさんは言った。

「人族の王の悪行は止まらぬ。誘拐され、死地に赴かされる異世界人は、今後もいるであろう。ならば、異界人にとって馴染み深い、親しみを覚えるような名を、名乗つてみてはどうかと」

……。

「はあ！？」

「うむ。じゃからな。われらは、魔王の眷属や、魔王となるのが確実な子どもには、異世界風の発音の名をつけるのよ。慎重に、占つてからな。

そなたの言う、ハッセ・ガワー・アマールチカは、力のある芸術家であつたようじゃな。わらわたちの世界の占者にも、その力が見

えたのじゃから

「はあ！？」「

「ゆえに、わらわは『サザエ』ぞこます（サジヤー・ハイデ・ゴウシャ・ザイ・マルス）』と名付けられ、息子には『タラちゃんです（タラチ・イアンデス）』といつ名が贈られた」

「はあ！？」

あたし、睡然。開いた口がふさがらない。

「え、いや、ちょ、そしたら、魔王さま、え、代々、占つて、そんで『タラちゃんです』とか言つ名前……え、まさか…そしたら、

『イクラちゃん』って名前の人もいるんですかっ！」

思わず食いついた。

「イクール・アルチ・イアンデスは、わらわの従姉弟の息子じゃ」

「おお！ タラちゃんのはどこがイクラちゃん！」

素晴らしい。

「じゃ、ワカメちゃんとか、カツオくんとかー」

「ワールカ・メイチー・イアンデスは、妹じや。カイチ・ウー・ウオークンは、弟になる」

なに、そのシンク口率。

「じゃ、じゃ、フネさんとか、波平さんとか、いますか！」

「フニー・H・スアンテスはわらわの甥。ナムール・イーフ・エイティスは、」

「お父さんですかー！」

「いや、叔父じや！」

「アッピン。

ちよつと残念。

「うわー、でもさ」「シンク口率……」

「ひっかかる。変なふうにテンション上げがった。

「あ、そしたらマスオさんは？」

「その名前の者は、おらなの！」

「そうですか……」

「氣の毒に、マスオさん。いや、別に氣の毒でもなんでもないんだけどー！」

「いっちでも影が薄いのか、マスオさん。あの話でも婿養子状態だ
つたし……ん？」

あれ、そしたら、いっちの占い師さんが優秀だってことで、長谷
川町子先生が預言者とか何とか言つことにはならないのじゃ？」

意外でした。後編。

あたしの言葉にサザエさんは、首をかしげた。

「なぜ、やうなるのじゅ？」

「え、だって。じつちの魔族の人人が占つて、あたしの世界の、良く知られたマンガの登場人物の名前を、その、見つけてくるんだったら……」

「トホコ。物事は響き合ひ、連動するものぞ？」

サザエさんは、つややかな黒髪を優雅にかきあげた。

「世界と世界は、互いに映し合ひ、つながりあつものぞ」

「はあ」

「ゆえに、われらが占つて見つけた名は、そなたの世界においても預言の元にある名である」

あたしは、首をかしげた。

「よくわかりませんけど……」

「力は力を呼ぶ」

サザエさんは言った。

「わからぬか？ そなたの知るハッセ・ガワー・アマールチカが偉大な人物であつたからこそ、

われらの世界にその力が響いたのじや。

その響きを、占い師は見つけ、引き込んだ。

ゆえに、ハッセ・ガワー・アマールチカは、預言したとも言えるのじや。意識せず、それでいて確実に、二つの世界をつなげたのじやからのう。おのが作品によつて」

「え、……ええ～？？？」

「わからぬか。したが、そういうものじや」

くくつと笑つてサザエさんは、ミルクティーを一口飲んだ。

「魔法の法則は、あたしにはさっぱりです……」

「力は力を呼ぶだけじや。単純じやぞ？」

「う、うひへん？」

全然わからん。

「ええつと……とにかく！ 異世界の言葉を、代々の魔王さまは名前にしてゐるんですね？」

「そうじや。それで、まあ、悲劇はかなり減つた

サザエさんの言葉に、あたしは納得した。そりやそうだ。『サザエで』『やこ』『ます』とか、『イクラちゃんです』なんて名乗られたら、

思わず止まる。思春とかやる奴とか、いりこぐ。

「やう言えば、あたしの他にも勇者ついていたんですか?」

「何人か会つておるわ。どうも、そなたと同じ世界とは限らぬようじやが」

「やうなんですか?」

「うむ。わらわや、妹たちの名に反応せぬ者もおつたのでな。そなたの前に来た勇者は、おそらく同じ世界の者であろうが」

「あたしの前の勇者……」

「三十年ほど前になるか。若い男でな。相手をしたのは、わらわだつたのじやが……、駄乗つた瞬間、泣き崩れられた」

「は?」

「『』いんな美女が、サザエさんだなんて……ー』と罵られてのう。

魚をくわえた猫がどうのと言つておつたが」

「あへ……それ、たぶん、あたしと同じ国の人ですね……」

衝撃の度合いがわかる。脳裏に流れたであろうトーマソングも、あたしと一緒にだつたろう。

「あれ、でも三十年? そんな前からあのアニメあつたっけ?」

「あちらりといちらでは、時の流れが違つておるようじやぞ。勇者たちの話をまとめれば」

「あ、そなんですか? あやへ……やうこいつ設定の話あるな、言われてみれば」

むじうの世界で読んだ、異世界トロツプもの「ノーブ」を想い出し

「つ、あたしはうなずいた。

「まさかの同級生だつたり？　いや、それはないか。いきなり行方不明になつた同級生とか、いなかつたよね……むしり、あたしが行方不明者……」

あ、ちょっと落ち込んだ。

「いや、しつかりしる、あたし。ええとサザエさん。それで、その勇者はどうなつたんでしょうか」「会いたければ呼び寄せるぞ」「呼び寄せ……え、まだこつちで生きてるんですか！？」
「つむ。

「わらわの夫じや」

…………　まい？

「シュウ・ゴー・ハマー・ノウ・レク・サー・ジヤ。いろいろあつての、わらわの夫におまつた」

「つ、つと、サザエさんが微笑んだ。

「え、しゅ「ハ」」……修吾さんかな。ハマー・ノウ……浜野？　夫…
え、じゃ、タツリちゃんのお父さん？」

「うむ。わが城に住み込んで、あれやこれやと働いておる。ああ、
『レク』といふのは、婿という意味じや。レク・サーディヤで、わら
わの婿、ということじやな。

シユウゴにはこちらに身寄りがなかつたゆえ、わらわが娶る形にな
つての」

「は、じゃあ、えと、いわゆる入り婿……つてことは

あたしは思わずつぶやいた。

「ロアルマスオさん

会いました。

「……と、言つわけで、俺が浜野修吾はまのしゅうごです。前魔王陛下まむわいおうじやであるサザサザHですさんの、夫をやらせていただいています」

三十過ぎに見える、純日本人な顔立ちの男の人が、会釈して言った。あたしは軽く頭を下げた。

「神山透子かみやまとおほこです。えっと、浜野さん、あたしと同じ日本人……」「そりだよ。透子ちゃん……そう呼んで良い? 透子ちゃんも、衝撃受けたでしょ、魔王の名乗り聞いて」「ええ、まあ。……『タラちゃんです』って言われたし」「俺は、『サザHでござります』だった」

一人して、遠いまなざしになった。

「長谷川町子ながたにまちこです」
「そだね。……おれ、タラチが生まれた時にさ。もつとカッコイイ名前にしたかったんだけど」

あ。やっぱり、タラちゃんのお父さんなんだ。

「サザHに晴れやかな顔で、『この子の名前はタラちゃんです!』

つて言われた時には、泣けば良いのか笑えば良いのかって気分になつたよ。わかってるんだけどね？ 次に呼ばれる勇者のためだつて。わかつてはいるんだけどね？

でも自分の息子に『タラちゃん』って………

「ひそり泣きました、と浜野さんは言つた。気持ちはわかる。

「えつと、でも、魔王って代々、イソノさん一家の名前になるの？」

「この先はどうかわからぬけど……俺の前の勇者のときは、魔王の名前はイソノ家の名前じやなかつたよ」

「へえ？」

「その時は確か、アイムー・ミク・イーマ・ウーシュと、アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュっていう、双子の魔王だった

「ん~？」

あたしは首をかしげた。何のアニメだらう。その名前のキャラクターが思いつかない。

「えと、アイムー……？」

「知つてると思つよ、透子ちゃんも。

ちなみに、その時の勇者は、魔王の名乗りを聞いたとたん、笑いの発作に取りつかれて、どうにもならなくなつたらしい。最終的に、『子どものころの友人であるミッキーとミニーに剣を向けるなど、俺にはできない!』と言つて、戦闘はチャラになつた

「ミッキーとミニー？」

「H-m Mickey Mouse（アイムー・ミク・イーマ・
ウーシュ）と、H-m Minnie Mouse（アイムー・
ミニー・イーマ・ウーシュ）」

浜野さんが発音してくれた。ああ。

「世界的に有名な、例のネズミたちですか……」

英語圏の人だつたらしい。

「召喚される勇者の国に召わせて、アニメのキャラの名前、引っ張り出してるんですか。マジパネエ、魔族の占い師」

「ううしー、『俺はミッキーマウスだ！』『あたしはミニー・マウスよー。』と召乗られた、英語圏の勇者の衝撃も、半端なかつただろう。笑いの発作か。うん、そつだうづね……。

「えーとでも、浜野さん、若いね？ 三十年いつて聞い
たけど」

話題を変えると、浜野さんは、「あ、といつ顔をした。

「あ、それね。ちょっと裏ワザって言つたか。俺、今、五十は越えてるんだ」

え。

「来た時、二十六だったから。でも、サザエと一緒になつてから、何か起きたみたいで。老化がゆっくりになつた」

「へえ……」

「まあ、でも、ありがたいよ。魔族は長命だし。タラチが成人するまで、生きていたかつたからね」

「ああ。……良かったですね。タラちゃんも立派な魔王になつたし」

そう言つと、浜野さんは、照れたような、誇りじこよしの顔をした。あ、お父さんの顔だ。

「親の欲田じゃないけど、タラチはがんばつてるよね」

「あ、はい。カツコイイです。貴禄あるし。お城の人たちからも、慕われています。評判良いですよ」

「あ、そう? ふふふ。だって、サザエと俺の子供もだもんね」「デレデレな顔になつてますよ、浜野さん」

ふふふ、とあたしが笑うと、浜野さんは赤くなつて、でも嬉しそうな顔をした。

「いや、ほんとにね。タラチは、体が弱くて。熱ばっかりだす子だつたんだよ。それが、大きくなつて……感慨深いと言うか」

「タラちゃん、体弱かつたんだ……」

「うん。サザエの魔力が強いのに、俺はそうでもなかつたから……子どもに影響出たみたいで。でも、ここまで大きくなつたんだから、もう大丈夫だよね。」

「後は、成人するだけだし」

……え？

「浜野さん、今、なんて言いました？」

「ん？ サザエの魔力が強いのに、俺はそつじやない……」

「いや、その後」

「子どもに影響出たみたい？」

「もうちょっと」

「大きくなつたから、もう大丈夫……あとは成人するだけ？」

きょとんとした顔の浜野さんに向かつて、あたしは叫んだ。

「タラちゃんて、成人してないんですか！？」

「まだだよ。だって、あの子、十五歳だから」

なんですと！？

「まさかの年下～つ！～！～？」

衝撃の事実。

魔王さまなタラちゃんは、年下の男の子でした。

集まりました。

田の前には、せりあらじい美形たち。

青く輝く髪と、氷にも似た薄青の瞳、白く輝く角と翼も神々しい男性。彼の名は、

「波平さん」

「会えてうれしいぞ、トオ！」

優雅な微笑も神々しい。なのに波平さん。彼の名前は、波平さん！

「ほんに。」いたびの勇者はかわいらじこの「」

「フネさん……」

真紅の髪と瞳の、燃え上がらんばかりに情熱的、官能的な美女が言った。漆黒の角がセクシーです、お姉さま。動くたびに、お胸が揺れます。フネさんなのに。フネさんなのに！

「タラチは、良い娘に出会つたよね

涼やかな聲音で言づ、金髪碧眼の美青年。金色の角と翼がまばゆい。音楽とか聞こえてきそう。ハレルヤ～とか歌いたくなりそう。

「イクラちゃん……」

そんな彼の名前は、イクラちゃん。
あたしは、思わず天を仰いだ。

「どうした、トホ？」

その中でも、美形ぶりではひけを取らない、赤い瞳の漆黒の魔王
さまがこちらを見る。なんかもつ、無駄にキラキラしてませんか。

「なんでもないです、タラちゃん。ちょっと、無性に、いろんな所
に『メンナサイ』と言いたい衝動にかられただけです」

涙をじらべつたあたしが「うーん」と呟いて首をかしげた。

「父上と同じようなことを言つた。異世界の勇者とは、みな突然に
天を仰いだり、打ちのめされたような顔で、夕口に向かつて走つた
りするものなのか」

「異世界には異世界の事情が……って、浜野さん、そんなことやつ
てたんですか」

「『サザエさんのお母さんが、フネさんだなんて…』と、叫びな

がら

ああ。いろいろ、いろいろ、ギャップを感じたんだらうな。フネさんの揺れる胸を見つめつつ、あたしはそう思った。

「異世界の勇者とは、良くわからぬものだな

教官！ と言いたくなるような、クールな美女が言った。青みがかつた銀髪に深い青の瞳、白銀の角と翼の、

「ワカメちゃん
「俺もいるで〜」

ワカメちゃんと同じ色彩の、ぐだけた感じの美青年が手を振った。

「お久しぶりです、カツオくん。この間は、お花をありがとうございました」

「女の子への礼儀だから〜」

さりきらししい笑顔で、銀髪の青年が手をひらひらとしてみせる。ちょっとチヤラい感じが魅力的と言つか、まばゆいと言つか。

あ、いかん。本気で涙が出てきた。もう、キラキラがハーレーション起しそうだよ、美形集団。ああ。それなのに。それなのに。

某イソノさん一家の名前なんだよ、全員！

「話には聞いていたが、じうして直に見てみると、トオロは可愛らしいなあ。自分をしつかり持つていろし」

微笑む波平さんこと、ナムール・イーフ・エイティスさん。皿口紹介の時には、『波平です』としか聞こえなかつた。

「あれこれと着飾らせ、可愛がりたくなるの、ビビッや。わらわの城に来ぬかえ？」

色氣満載の微笑みを向けてくる、フネさん」とフーニー・スアンデスさん。彼女の名前はあたしには、『フネさんです』としか聞こえない。

「ふむ。だが、異世界人の変わつた所はなあ」

「別に良いじゃない、それぐらい。チャームポイントだと思えば」

どうやら双子だったらしい、『ワカメちゃんです』ことワールカ・メイチー・イアンデスさんと、『カツオくん』こと、カイチ・ウー・ウォークンさん。

「祖父殿は、何かと良く笑い出す癖を持っていたではないか。異世

界の者には、異世界の者の事情があらへ。のべ、シヨウゴヘ。

そこにサザエさん」と、サジャード・ハイテス前魔王陛下が言つ。唯一、あたしと同じ感覚を共有できるだらう日本人にして元勇者、今はサザエさんの婿という立場になつた浜野さんは、ひつそりと気配を消すようにして立つていたのだが。この言葉に苦笑いを浮かべた。

「サザエ……ああ～……まあ、そうですね……」
「そんな所もかわゆく思つておるぞ、シヨウゴ」
「さ、サザエ……」

浜野さんは、真っ赤になつた。よつ、じ両人。ラブラブですね、リアルマスオさん。

「それにしても、笑い出すおじいさんつて……」
「吾には曾祖父に当たるな。四代前の魔王、アイムー・ミュー・イーマ・ウーシュの婿になつた勇者だ」

あたしがつぶやくと、その言葉を聞きつけたタラちゃんが言つた。浜野さんが、「ミー・マウスと結婚した人」と解説してくれる。ああ。例の英語圏の人か。

「魔王と結婚する勇者、多いんだ……？」

「うん、まあ。なぜかそうなる確率が高いみたいだよ。だから、透子ちゃんも安心してね」「え？ 何を」

「またまた。わかってるからね？」

いや、何を。

浜野さんからの謎の言葉に首をかしげつつ、あたしは改めて、周囲を見渡した。

魔王城のサンルーム。光が差し込む、美しい部屋。のどかで平和な場所。

そこにいる美形集団。まぎれこんだあたしは、すげく居心地悪いです。どっちをむいても美形。どこを見てもキラキラ。

「浜野さん……、そばにいて良いですか！」

「え、なに急に！」

「浜野さんの顔が、今のあたしには安息の地なんですねー！」

美形集団にストレスを感じて、あたしは浜野さんの側に寄りついた。ビバ、普通顔。ビバ、のっぺりな日本人顔！と、思っていたら、後ろから襟首をつかまれ、ぐいっと引っ張られた。

「うひやわー！」

バランスを崩して転びそうになつたが、ぼすつと誰かの胸に抱きかかえられ、免れる。……って、誰かの胸？

「おや」

「まあ」

「ほう」

「ひゅーひゅー」

周囲から上がる声。見上げたあたしの目に、不機嫌な顔のタラちゃん。え？ 何がどうなつた。

「え、ちょっとタラちゃん。なんで引っ張つたり」

「トオコは」

もがいて腕から抜け出さうとしたが、タラちゃんは許さず、さらに力をこめてきた。ぐえ。

「吾より父上が良いのか」

「はあ？ 何の話……」

「父上は、母上のものだ。トオコが想つたところではひどいもなうな」「いや、だから、何の話

あわあわしてくると、「これ、女子おなじに対して乱暴じやぞ、タラチ。

トオロに怪我をさせる気か?」とサザエさんが言つた。タラちゃんは、不満そうな顔をしたが、腕の力をゆるめた。あたしはあわてて、タラちゃんの腕から抜け出して、距離をとつた。

すると、ずん、と空気が重くなつた。ちょっと冷や汗が出た。何だかよくわからないけど、タラちゃんの不機嫌さに拍車がかかつている。

「ははは。若いなあ、タラチ」

「女の子は、優しく扱わないとダメよ」

「やつぱり良いなあ、タラチ。魔水晶の鉱山一つあげるから、交代してくれない?」

周囲から、上がる声。わけわからん。特に最後の、イクラちゃんの発言は、なんなのだ。

「断る」

タラちゃんは、威嚇するような勢いでイクラちゃんに言つと、またあたしの腕をつかんで引っ張り、抱きついてきた。ちょっとー。お姉さんに甘えたい子どもですか、君はー。十五歳なのは知つているけど、見かけは完全に成人男性なんですよ、異世界事情が何だか知らんけど!

「うお、なつくな! なでるな! 匂いをかぐな! ヤメテヤメテー、お姉さんのライフはゼロよー

「ああ、仲が良このつ」

がっしり抱き込まれ、ふんふん匂いをかがれ、ぐりぐり頭をこすりつけられたあたしがじたばたしていると、微笑ましげに言われた。眺めてないで止めてください、サザヒさん！」

「本当だね。相性もよさそうだし。一族の主だったものも、好意的だしね。良かったね、透子ちゃん」

「ここここしながら、浜野さんが言った。何が。何が良かつたんですか！」

すると、浜野さんは、爆弾発言をしてくれた。

「だって、君はタラチのお嫁さんになるんでしょ？ 集まつたみんなに認めてもらえて良かったねえ」

その瞬間。

あたしの中で、全てが止まった。世界も。思考も。何もかも。
ただ、浜野さんの言葉だけが。
繰り返し、あたしの中で響いていた。

タラチのお嫁さん。
タラチのお嫁さん。
タラチのお嫁さん。

「……タラちゃんの、お嫁さんんんん～～～っ！？」

そうして次の瞬間、動き出した世界の中、愕然として叫ぶあたし
がいた……なんでやねん！

集まりました。（後書き）

まさかのハグコメ展開。

「それで、ユーリーいつながやったのか、説明してほしこんです
けど」

ジト皿ハリマツだあたしが、浜野さんが苦笑いをした。

「いやー、まあ……ねえ？」
「誤魔化されませんから。そんな顔されても」
「や、誤魔化す気はないんだけど……」つちの子が申し訳ない。てつ
きつ手順は踏んでるものと……えへ「
「手順も何も、あの日初めて聞かされましたよ、あたしがタラちゃん
の花嫁候補だなんて！」

魔王城の庭。のどかに小鳥がさえずり、美しい花々が楽しめる東
屋で、あたしと浜野さんは向き合っていた。
後ろからあたしががつしり抱き込んで離さない、タラちゃん込み
で。

「何とかしてくださいよ、これー、なんなんですか。ついて回られ
るし、抱きつかれるし、匂いかがれるし、舐め回されると、変態に
もまぶがあるって、だから舐めるなーーーー！」

べんりと首筋をなめてきたタラちゃんを、ぱりりと殴る。しかし

タラちゃんはあやめな。『おひつわの腕の力を強めてくれ。

「ぐえ、痛い痛い、痛いつて！」

「離しなさい、タラチ！ 彼女を殺す気ですか！」

あたしの様子に荒てた浜野さんが言い、手を伸ばしてベシツと角を叩いた。ぐう、と妙な声がして、腕の力が弱まる。

「ああ、透子ちゃん、魔族の弱点、角だから。絶対的な弱点ってわけじゃないけど、びっくりさせるぐらいはできるからね？ ほら、タラチ、離しなさい！ 女性への礼儀はビレーハ行つた？」

恨めしげに浜野さんを見ていたタラちゃんは、しぶしぶとした感じで、あたしから腕を離した。

その代わり、体をくつづけてきたけど。東屋の椅子が、なんかぎゅつぎゅつな状態に。

「犬か」

「似たようなものだね」

思わずじぼしたあたしの言葉に、浜野さんがうなずいた。

「ザザンの母方の祖先に、炎狼がいたそだから。タラチにもその

「形質が出てる、うじこよ。目が赤いでしょう」

「へえ、そう……って、ワンコ入ってるの、タラちゃん！？」

だからか。だから、匂いかがれたりしたのか。

「でもなんで、こんなにくつつい……ちょっと、タラちゃん！説明してもらえない？ どうしてあたしが、あなたの嫁候補なのよ！」

するとタラちゃんは、傷ついたような顔をした後、驚愕の言葉を放つた。

「最初に申し込んできたのは、トオロの方ではないか

なんだと？」

「あたしが、いつ

「初めて出会った時だ。そなたは吾に、婚姻の申し入れをしてきた

なんだと！？」

「魔族の王たる吾に対し、一歩も引かず。堂々たる申し入れであつ

た

…。

「なんですか～～～つ！～～？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044ba/>

勇者と魔王SS～活動報告小話集2～

2012年1月8日19時45分発行